

日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol. 14. 2015年11月1日

目次

巻頭語

第七回学術大会をお引き受けして

そして本学会初代会長の恩田彰先生をお偲びして・・・・・・・・・・ 阿部 洋子

追悼 恩田彰先生

「温容」——恩田彰先生の思い出・・・・・・・・・・ 岡野 守也

恩田彰先生を偲んで・・・・・・・・・・ 加藤 博巳

著述紹介

対話と争い—宗教間の関係はどうあるべきか？・・・・・・・・・・ ケネス田中

日常に根ざす仏教をめざして—内観療法を導入した心身のケア・・・ 千石 真理

ご報告とお知らせ

第25回 中村元東方学術賞に三友健容先生

「死にゆく人と共にあること」プロジェクト・ワークショップ、シンポジウム
カウンセリング基礎講座のご提案

編集後記・・・・・・・・・・ 千石 真理 ・ 松村 一生

巻 頭 言



第七回学術大会をお引き受けして
そして本学会初代会長の恩田彰先生をお偲びして

跡見学園女子大学 阿部洋子

初めに、第七回学術大会の大会校に御指名を頂きました栄誉に感謝申し上げます。

仏教心理学という学会名に相応しい学術大会を開催させて頂きたく存じております。非力ではございますが、一生懸命、努めさせていただきますので、宜しく御指導・御協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

さて、会員メールが配信されましたので、御存知かとは存じますが、本学会の初代会長でいらした恩田彰先生が、本年7月20日の朝、静かに御永眠なさいました。享年90歳でいらっしゃいました。御葬儀は、総本山知恩院と浄土宗宗務庁からの御弔辞、大本山増上寺からの御弔電に見送られ、浄土宗の僧侶としての旅立ちでいらっしゃいました。心より御冥福をお祈り申し上げますと共に、今回の学術大会を無事に開催できますことを、恩田先生に、直接、お伝えできないことが残念でなりません。プログラムの内容を、誰よりも、お喜び下さったのではないかと存じます。

さて、恩田先生と私の出会いは、当時、私が書いておりました、唯識思想を通して心理学的考察を試みるという拙論をお読み頂きましたことに始まります。その後、恩田先生のお蔭をもちまして、某学会での発表の機会を与えて頂き、更には某出版社発行の仏教文化に関する事典の編纂にも関わらせて頂きました。また上座部仏教の僧侶の方による研修会参加にもお声をかけて頂き、新たな発見をさせて頂きました。そして本学会の会員として迎えて頂く機会も恩田先生から与えて頂きました。この度の学術大会は、恩田先生への感謝の心をこめて、執り行わせて頂きたいと存じております。

ところで、今回は東京でということ、アクセスの良さを生かして、大勢の皆様にご参加頂ければと存じております。ただ本学は、宗教とは無縁の大学でございます。そ

のため大学を上げての大会開催とは参りませんことをお許し頂きたく存じます。ただ内容は、会長のケネス田中先生を始めとする多くの先生方の御尽力によりまして、充実したものにして頂いております。

先ず、基調講演では精神科医でいらっしゃると共に、長年に亘り密教的座禅を実践されている作田勉先生に御登壇頂きます。作田先生からは、精神医学、密教的座禅、現象学など幅広い御見識に裏打ちされた御講義を拝聴できるかと存じます。更に、短時間ではございますが、瞑想を体験して頂けるような御講演を予定して下さるとのことでございます。

次に、シンポジウムでは、仏教由来の理論と方法を用い、臨床家として実践されている4名の先生方から、仏教的心理療法の実際を話題として取り上げて頂ける運びとなりました。欧米流の心理療法を学んでいる心理学ワールドの人間に、大きな刺激を与えて頂く好機になることと期待致しております。また、お釈迦様を最高のセラピストと考えるならば、現代のセラピストが学ぶべきことは何かなどを学ぶ機会を心理学ワールドの者に広めて頂ければ、幸いと存じております。仏教学と心理学の境界線を越え、融合を図ることができるような、多方面からの活発な質疑応答が行われることと存じます。

最後に、個人発表でございますが、多くの先生方から、お申し込みを頂きましたことを感謝申し上げます。仏教学から心理学まで、バラエティに富んだ御発表を頂けることになっております。

そして最後に、これまで本大会は、12月の第2土曜日に開催されておりましたが、本学ではその翌日に入試が設定されておりますため、その日程では、お引き受けすることができませんでした。既に御予定を入れていらした先生方には、日程調整をして頂かなければならず、誠に申し訳なく存じております。どうぞお許し下さいませ。それでは、多数の会員の皆様の御参加を心より、お待ち申し上げます。

追悼 恩田彰先生

「温容」——恩田彰先生の思い出

サングラハ教育・心理研究所主幹 岡野守也



学会のメールで恩田彰先生のご逝去のことを知った時、すぐ心に浮かんだのは先生のまさに「温容」という言葉がぴったりの笑顔である。その印象は、初めてお目にかかってから最後に学会の大会でお目にかかった時までずっと変わらないものだった。いつも、すらりとしたスタイルのダンディな背広姿で、学者というよりジェントルマンという雰囲気をおられた。

すでによく知られているとおり先生のご専門は創造性の心理学的研究で、責任編集『創造性の基礎理論——創造性の教育1』（1967年、明治図書）、『創造性の研究』（1971年、恒星社厚生閣）、『創造心理学』（1974年、恒星社厚生閣）、『創造性開発の研究』（1980年、恒星社厚生閣）、『創造性教育の展開』（1994年、恒星社厚生閣）等々数多くの業績を遺しておられる。

加えて、『禅と創造性』（1995年、恒星社厚生閣）、『仏教の心理と創造性』（2001年、恒星社厚生閣）というタイトルのご著書があるとおり、創造性に関わって禅・仏教にも深い造詣をお持ちおられた。

恩田先生の詳しい略歴・業績目録は『東洋大学文学部紀要 教育学科・教職課程編』（第48集第20号、1994年）に掲載されているのでご参照いただきたいと思う。

先生にお目にかかったのは、1998年1月、奈良・興福寺の会館を会場にお借りして開催した「仏教と心理学・心理療法の接点を考える集い——仏教心理学の可能性を求めて」に、記憶違いでなければ文教大学の土沼雅子先生を通じてご紹介—ご参加いただいたのが初めてだったと思う。

寒い季節の寒い奈良であえて開催したのは、興福寺が大乗仏教の深層心理学ともいべき唯識を千数百年にわたって伝えてきた法相宗の本山であり、そこに「歳の初めに寒さをもとせせず」という強いお気持ちがある方にだけ集まっていればいい、という筆者の若気のこだわりからだった。そして、まさにあえてという感じで集まってくだ

さった熱心な方々と熱い討論をした時の雰囲気は、今でも記憶に新しい。

やりとりの内容は忘れてしまったが、そこで筆者は今から思うとかなり率直にすぎる発言をし続けたにもかかわらず、恩田先生はあの「温容」でやわらかに受け止め、あのやや甲高い穏やかな声で受け答えしてくださった。集いの開催を大変喜んでくださり、始まってしばらくしてからだったと思うが、「仏教と心理学ということでこんな集会ができる時代になったんですね」と発言され、その後、言葉が続かず、しばし涙ぐまれたことが強く記憶に残っている。

戦前から続き今でもアカデミックな学界にはある程度残っているのかもしれない、「仏教は宗教であり心理学は科学だから相容れない」、「東洋の無我と西洋の自我は対立するもので触れ合うことはできない」といった偏見は、1960年～80年代にはきわめて根強くあって、そうした中で心理学と仏教の両方に関わって研究を続けられておられた先生は、学界内政治的にずいぶんご苦勞をしてこられたのだろうな、と推測したものである。

その後、先生が編集に関わられたシリーズ人間性心理学『東洋の知恵と心理学』（1995年、大日本図書）や『臨床心理学辞典』（1999年、八千代出版）などに執筆の依頼をいただくなど若干の仕事上のつながりはあったが、それぞれの問題関心の方向がやや違う——先生は創造性、筆者は煩悩と覚りのメカニズム——ということと多忙さのためもあって、それ以上深くお付き合いさせていただくには到らなかったが、日本仏教心理学会の設立に向けて現会長のケネス田中先生や現副会長の井上ウィマラ先生と相談している中で、これまでのご業績と大先輩であることから初代会長は恩田先生にお願いするのがいちばん自然なのではないかということになり、お願いするようになった。

先生は、当初「もう歳ですから」と辞退されたが、私たちのたつての願いで引き受けてくださった。ご辞退もご承諾もいつもの穏やかな笑顔だった。以後、大会等でお目にかかるたびにあの温容を拝したことが懐かしい。

改めて、ご高齢にもかかわらず会長の役目をしていただいたこと、多くの業績

となによりも「温容」というお人柄の記憶を遺していただいたことに、心から感謝したいと思う。

「恩田彰先生を偲んで」

駒澤大学文学部非常勤講師 加藤博己

平成 27 年 7 月 20 日、本学会初代会長を務められた東洋大学名誉教授恩田 彰先生がご逝去されました。恩田先生のご専門は、教育心理学ですが、催眠や精神分析、カウンセリング等の幅広い領域の臨床心理学にも大変造詣が深く、東洋的な心理学を意識した『臨床心理学辞典』八千代出版（1999）を共編著で出版されています。また、創造性の心理学的研究の第一人者であり、さらに、1961 年・1962 年に行われた文部省総合研究「禅の医学的・心理学的研究」（班長：東洋大学長佐久間 鼎）では、坐禅中の脳波測定を行った東大病院の平井富雄博士と共に幹事を務められました。恩田先生は、「創造活動と禅的体験における創造過程の心理学的研究」というテーマで参加され、これをきっかけに禅の心理学的研究に携わることになりました。当時、これらの研究を海外へ紹介するために作成された 16 mm フィルム「Science of Zen」には、あたくも禅僧のごとき凛とした姿勢で歩く若き日の恩田先生が映っています。

先生が著された禅心理学研究の文献数は少なくとも 64 点以上あり他の研究者を凌駕しています。この点で、先生は他に追随を許さない禅心理学研究の第一人者であり、哲学館（現 東洋大学）を創設した井上円了の遺志を継ぐ仏教心理学者の後継者と言えるでしょう。

先生は大変熱心な研究者で、学会発表を除いても、東洋大学名誉教授になられるまでに少なくとも 24 冊以上の著書、173 点以上の論文を執筆されています。中でも、先生が監修された井上円了著『新校 仏教心理学』群書（1982：原典 1897）は、日本に心理学が導入された当初に著された仏教心理学の先駆けとなる貴重なものです。また、1992 年に刊行された“心理学評論”誌の特集号「東洋的行法の心理学」では、「日本における東洋的行法の研究史」という論文において、明治・大正・昭和の禅を中心とした東洋的行法の心理学的研究をレビューし、その後の研究の礎となりました。

さらに、『仏教の心理と創造性』恒星社厚生閣（2001）は、禅とヴィパッサナーという止観 2 つの瞑想法を同時に扱った名著で、当時日本ではまだ注目されていなかったヴィパッサナー瞑想にいち早く着目し、時代を先取りした図書となりました。

このように、先生は大変ご高名で雲の上の人のような存在ですが、一方で他者への気配りにも余念がなく、年の差が 40 歳以上離れた私のような者へも毎年年賀状を欠かさず送ってくださり、20 年以上のおつき合いの中で、ご著書や新聞記事の切り抜きのコピーなどの貴重な資料を、青色インクでしたためられたお手紙と共に送ってくださることがしばしばあり、実に面倒見の良い先生でした。先生は 25 を超える学会に所属し、複数の学会で会長や理事等を長きにわたって務めてこられ、諸分野に精通し、各界からの信頼も厚かったので、学会での論争ではいつも仲裁役を務められていました。

本学会への貢献も誠に多大であり、1998 年 1 月に羽矢辰夫先生、岡野守也先生、西光義敏先生、大須賀発蔵先生、土沼雅子先生、藤見幸雄先生らと共に奈良の興福寺で「仏教と心理学・心理療法の接点を考える集い」を開催し、「仏教と心理学—日本における対話の歴史」というタイトルでお話をされています。この集いは、結果的に本学会設立への伏線となりました。そして、2008 年 11 月 30 日に日本仏教心理学会設立総会・シンポジウムが武蔵野大学で開催された際に初代会長に就任され、本学会創成期の重責を担ってこられました。また、本学会推薦図書『仏教心理学キーワード事典』春秋社（2012）では、「刊行によせて」に原稿を寄せていただきました。

このように、ご業績、お人柄共に余人をもって代えがたい先生を失ったことは、本学会にとって誠に痛手で残念なことです。われわれ学会員一同が、仏教心理学研究の発展、および、社会的貢献に、より一層励むことで、先生の御遺志を継いでゆきたいと思います。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

著述紹介

在家仏教

zaikabukkyo



12
2015

ケネス田中 (武蔵野大学教授)

「対話と争い—宗教間の関係はどうあるべきか?」

在家仏教 12月号

イスラム国の宗教戦争やオウム真理教などのカルトによる問題で、宗教は怖いというイメージを、強くもっている日本人が多い。しかし、その原因として大きいのは、メディアが宗教のお祭のようなイベントを主に扱い、宗教の内容など、本当の姿を報道していないことによる。

また、宗教になじみがないもう一つの原因として、宗教教育が十分ではない、という背景がある。現在も宗教間の争いといわれる対立が世界各国で認められるが、これは本当は宗教の争いではなく、経済的、民族的、歴史的、政治的な要素が原因である。多様化する世の中で、世界の人々が共存、共生してゆくためには、宗教の本質のみではなく、倫理観が必要である。そのためには、宗教間の対話が欠かせない。宗教の中には、その特定の教義を信じなければ救われない、という立場が主流のものもある。しかし、仏教は信じる宗教ではなく、目覚める宗教であるので、仏教でなくとも、自分が選んだ道を通して目覚めてほしい、と願う寛容さをもっている。最近では外国人の滞在者も増えてきた。日本の仏教徒は教団の中に籠らずに、宗教間の交流、対話をする努力をしよう。仏教徒は寛容の精神を生かして、平和への貢献ができるはずである。

千石真理 (心身めざめ内観センター主宰)

「日常に根ざす仏教をめざして—内観療法を導入した心身のケア」

在家仏教 11月号



11
2015

内観療法は浄土真宗の僧侶、吉本伊信によって開発されたが、宗教色を抜くことにより、矯正界、医療界で普及した。しかし、東日本大震災以降、日本人がこれまで目を逸らしてきた死というものに向き合わざるをえなくな

ってきた。そのため、今年の内観学会、内観医学会では、内観と浄土真宗、スピリチュアリティの関わりについて議論を深めるシンポジウムが設けられた。医療の現場では、うつ病や依存症等に対する内観の効用が認められているが、精神症状が改善されたとしても、生きていく限り、必ず次の問題にぶち当たる。結局のところ、死という根源的な苦の解決を知って、初めて本当に人生を全うすることができる。一般に普及している内観は、今を出直すための内観に留まるが、僧侶が提供する内観は、諸行無常の中で不思議な縁で今生かされている自分のいのちを、後悔のないように生きて、安心して死んでいける境地へと導いていくことができる。著者が主宰する心身めざめ内観センターでは、他宗の僧侶の方も研修を受け、各宗派の教義と照らしても腑に落ちる、と喜んでいただいている。生きる苦しみを通して内観に出会った人々が、仏教の叡智と共にその後の人生を歩んで下さるようになるのは、著者にとって、無上の喜びである。

☆☆

ご 報 告

第25回中村元東方学術賞を、本学会運営委員で立正大学教授の三友健容先生が受賞されました。10月10日、千代田区のインド大使館にて授賞式が行われ、本学会会長のケネス田中先生がユーモアを交え、友人代表としての祝辞を述べられました。三友先生は、アビダルマディーバの解説、環境問題の解決に仏教が果たす役割の提唱等の功績を評価され、今回の受賞となりました。先生、おめでとうございます！



お知らせ

「死にゆく人と共にあること」プロジェクト

—伝統的知恵と医療を統合した新たなスピリチュアルケアの創造に向けて—

ワークショップ、シンポジウムのお知らせ

第1部：ワークショップ

「マインドフルネスによる終末期ケア」講師：藤田一照（曹洞宗国際センター）

永澤哲（京都文教大学）

井上ウィマラ（高野山大学）

日時：2016年1月10日（日）午後2時～11日（月/祝）午前10時

会場：同志社びわこリトリートセンター 滋賀県大津市北小松179

定員：40名（申込締切12月18日）参加費：18,000円

（宿泊費・食費・第2部参加費込み）

第2部：シンポジウム

「死の臨床に向き合う」—燃え尽き防止のための自己ケア—

講師：恒藤暁（京都大学） 武井麻子（日本赤十字看護大学） 栗原幸江（都立駒込病院）

井上ウィマラ（高野山大学）

日時：2016年1月11日（月/祝）午後1時～午後5時

会場：同志社大学今出川校地 寒梅館 京都市上京区烏丸通上立売下ル御所八幡町103

定員：150名 参加費：1,000円（当日1,500円）

☆☆☆ 参加申込・詳細は☆☆☆

<http://bwdj.org/>

Being With Dying研究会事務局

〒590-8515 大阪府堺市堺区香ヶ丘町1-11-1

関西大学人間健康学部 村川治彦研究室内

info@bwdj.org



割が果たせるよう、期待しています。そして、そのためには臨床心理や社会学の勉強が大切ですね。臨床仏教師や、臨床宗教師のプログラムが益々充実、発展することを念じています。

千石 真理

「じいじ」「何だい?」「ガイコツになっちゃったんだよ」「うん、知ってるよ」

家内の叔父が他界し、小さな葬儀に参列して以来、4歳の孫娘と繰り返される会話。

「おじいさんは、死んじゃったの?」「そうだよ」「どこに行ったの?」「阿弥陀様の所に行ったんだよ」「神様?」「うん、そうだよ」通夜の祭壇に掲げられていた、阿弥陀如来の絵姿を、孫娘は神様と認識したようだ。本当は、仏様なんだけどね。

「神様は、どこにいるの?」「西のお空のずうっと遠く、極楽にいるんだよ」「そっかあ」

「もう会えないの?」「うん」「さみしーね」「うん、寂しいね。でも、神様の所にいるから大丈夫」

「ガイコツこわいよ」「大丈夫、大丈夫」

「じいじ、こうして」と言って、小さな手を合掌する。

「そうだね、ナムアミダ、ナムアミダ」 安心立命、大丈夫、大丈夫。

松村 一生

